

「鹿島の涅槃図～受け継がれてきた文化遺産～」ギャラリートーク

「個々のスケッチから読み解く岩永京吉の涅槃図（興善院蔵）」

日時 平成31年4月28日
 場所 エイブル3階 研修室
 講師 石川 宗晴さん
 (岩永京吉美術館館長)

おはようございます、石川です。今日は朝早くからおいで頂きましてありがとうございます。

美術館を開館してから、今年の8月でちょうど6年になります。京吉さんのアトリエに残されていた作品も多かったんですけど「他にも有るんじゃないか？」と倉庫を片づけることになりました。4年前に倉庫を見つみると、いちばん奥に木の長持がありまして、その中に、昭和30年以前のスケッチなんかがいっぱい入っていました。それを整理していた時に、この涅槃図の下図を見つけて、おばあちゃんに訊きましたところ「そういえば」ということでした。



▲石川 宗晴さん

それまでは涅槃図を書いたというのは全然耳に入っていなかったし、「こんなものがあるよ」とか「古枝に興善院さんがあってそこに納めたよ」とかいう話は一度も聞いた事がなくてですね。まさか、と思っ

ていたんですけれども、3年前の2月頃、小笠原表具屋さんが「ちょっと見てみない？」ということですね。

「興善院さんから表具のし直しを依頼されたので、その前にちょっと見せておこうと思って持ってきたよ、どう？」と言ってくださったので、美術館に掛けて見たのが最初です。60年ぶりだったんですね。

長持から出てきたのは昭和31年1月のスケッチブックと小下図。それだけしかないと思っていたんですけど、ちょうど60年ぶり。2月15日の涅槃会を終えて、興善院さんが表具のし直しを依頼されたということで、「こういうものがある」って。確かにちょっと裏紙が朽ちて折れが入って、所々線が入っているような格好になっていたんですけど、見ますと非常に綺麗に描かれていました。そういうことでスケッチブックの下図と本図を比べると、変わっているところがあって、「これは面白いものが見つかった」と思ってですね。そこから涅槃図について勉強することにしました。



▲涅槃図 岩永京吉作（興善院蔵）

1年後の2月に、綺麗に表具がし直された涅槃図を興善院さんに見に行きました。確かに綺麗に金ピカになっていますし、絵も新しい裏紙がしてあるので、とても綺麗な形で見ることができました。

京吉さんは、スケッチと同時に菩提樹や沙羅双樹、お釈迦様のお母さんの摩耶夫人について勉強していただき、書きつけも出てきました。そのころ勤めていた鹿島実業高校専用の用紙に書いてありました。

スケッチブックにいっぱい描かれている登場人物は誰か？というのが気になって名前をいろいろ探したんですけど、涅槃図も名前入りの涅槃図というのがやっぱりあってですね。“これはだれそれ”という名札が付いていて、それを見ながら特徴を探してスケッチの画像それぞれに名前を付けたんですね。

今回ギャラリートークのお話を頂いて、もう少ししっかりと出典を明らかにして確認しておこうと思って探しました。確かに特徴のある人はわかったんですが、よくわからない人もいました。

その中で、「毘舍離王」というのはお釈迦様が亡くなられた場所、その地域を治めている王様だと思んですけど、その方は登場していないんですね。「三界妙夫人」というのも涅槃図にはよく出てこられるんですけど、これも描かれていません。



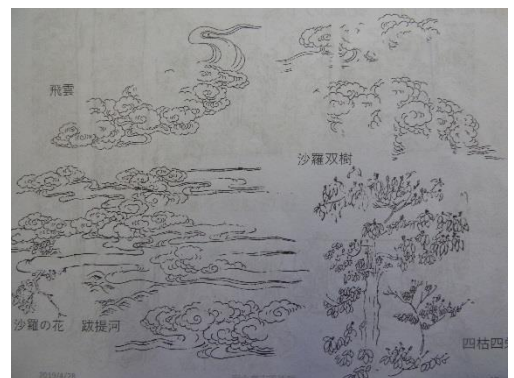
▲涅槃図（一部）と動物（スケッチ）

動物はたくさん描かれています。牛はスケッチでは水牛ですけど、でき上がりは普通この辺にいる牛、日本の牛になっています。象さんはスケッチでは耳が内側に見えるんですけど、本図では我々が知っている象さんの格好になっていますね。ほかに鼠や亀や蛇なども取り混ぜて創り上げているんですね。

雲についてもですね、雲に乗ってお母さんが天から降りてくる、というちょっと変わった事というか、「奇異な事が起こるよ」という事の一つの描き方、伝統的な描き方で

モコモコモコとしたような飛雲を描いています。スケッチではそれぞれパーツが描いてあるんですが、パーツがどこに行くのかは最後の構成だと思います。

涅槃図で有名なのは1086年に描かれた金剛峯寺の『絹本著色仏涅槃図』で最古のものだと言われていまして、上を向いているお釈迦様が描かれています。最初は上向きだったのがだんだん変わってきて鎌倉時代には横向きという形が主流になってきたようです。兵庫県立歴史博物館にある鎌倉時代の涅槃図は重要文化財になっていますが、やはり横向きで、手枕にしているんですね。そのように、描き方も変わってきています。



▲雲（スケッチ）

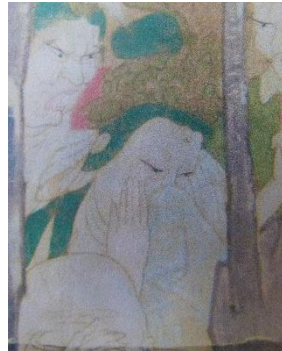
どうい動物を入れるのかというのも歴史的に変わってきて、だんだん賑やかになっていく。最初は亡くなられた周りを取り囲んでいるだけ、菩薩とか、お弟子さんとか、近しい人が周りにいて、俗人はちょっと離れたところにいるという感じでしたけれども、だんだん皆が寄り集まってきております。その他いろいろ見ていくと、名前が入ったものがありますし、横向き画像にも、いろんなポーズの仕方がある。膝を曲げているのもあります。

涅槃図は、お寺さんで必要とされるものなので、結構、需要があり、江戸時代の円山応挙の絵を制作するチームの中に、代々下図を作っているチームがあったようです。朝鮮の李朝の頃に入ってきたといわれている涅槃図が長崎の平戸にあります。それを基にしたように、位置とか顔立ちがよく似ているんですね。だから、それを下図にして、写し取ってきたものを代々門下で保存して、注文があったらそれを基に描く、ということをしていたのではないかと書かれた本があります。お寺さんによって、また宗派によっても「こうしてくれ」「ああしてくれ」というのが多分あるでしょうから、どう描き入れるかは、頼まれたときの状況でもかわっていたとは思いますが。

私は、涅槃図に描かれている仏、人物の名前を特定したいということがあって、名入りの涅槃図を探しました。金剛杖を持っていたり、玉を持っていたりしたら、誰なのかわかりますが、特徴がないと難しい。お釈迦様を囲んでいる者については、菩薩から明王、不動明王、天部というのがありますけど。



▲菩薩 (スケッチ)



▲涅槃図 (一部)

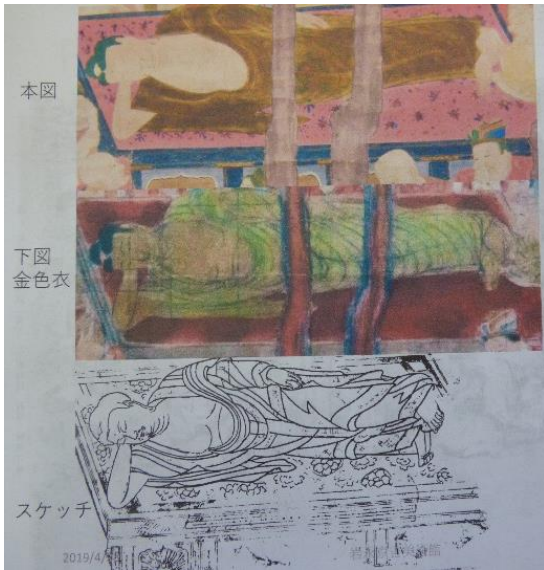
私が面白いと思ったのは、名前もそうですけど、スケッチの顔ですね。いちばんは菩薩の顔なんですけど、優しく悲しそうな顔をしているのがスケッチなんですけど、下図では悲しみを抑えたような表情です。本図では更に、悲しむと言うよりはもう、亡くなるのは解っていることなので、いよいよそういう時になったのかというような、もう覚悟しているような感じの目で、遠くを見つめています。「そういえばこういう事を聞いたな」という、いろんな悟りの話を見通すような、内面を見直

すような目つきに、菩薩は変わってきているので、描くにあたって京吉さんは、「どういう場面に仕立てるのか」というのを一生懸命考えたと思うんですね。

今、私は 68 歳ですけど、やっとうこうなんとなく、死ぬことも近づいてきたし、ジタバタしないで死にたいと思う欲望もあるしですね。そういうふうに考えると、悟りということをなんとなく知りたい。その中身を知りたいと思うことがあります。京吉さんが涅槃図を描いたのが 38 歳なので、その頃はともそういう概念には至らなかったと思うんですけど、それを超えて絵を描く者として、どういう表現にするのかというのを、やっぱり心に落として描いていた。そして、お寺さんに涅槃図を納める時に「勉強になりました」と、ご住職に話したらいいです。いろいろ書き写しては来るんだけど、単なる模写で終わらずに自分の中でまとめて描いたということで、やっぱり勉強になったんだと思うんですね。

その後、日展に出品するように、中央に向かってガリガリ頑張っているんで、とても悟りを開いていったとは思わないんですけど、やっぱりその時その時で、自分なりに何かまとめていったんじゃないかなと思います。

そういう意味でスケッチがあるんですけど、じゃあスケッチからそれぞれのパーツをどう組み合わせるのか、また、飛雲をどう配置するのかですね。沙羅双樹は、お釈迦様が亡くなられた時に東西南北に植わっている。八本が四本枯れて四本はますます栄えた、というお話になっているので、枯れた双樹と、隆々とした双樹を描くということになります。では、どの樹を隆々にしていくのか。また、樹を東西南北に描くと登場人物が見えなくなるので、そこを上手く出しながら、木の間から菩薩をちょっと覗かせたり、お弟子さんの顔を見せたり、と配置を考えないと登場人物を収めきれないと思うんですね。宝座の向きもありますし、お釈迦様の姿勢とか、衣をどうするかとかですね。お釈迦様は最



▲釈迦（スケッチ・下図・涅槃図）

後、金の衣で覆われたようにピカピカになっておられる、という話もあるんですけど、京吉さんが描いたのは非常に質素な衣になっていますね。いろいろ教えを説いていって最後に亡くなられたということなので、そのままの姿なのかもしれませんけど。

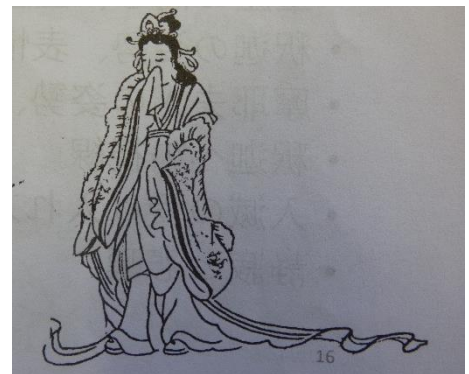
また、お釈迦様は他の者より背丈が高いんですね。一丈六尺がお釈迦様の大きさだというふうになっています。だから4メートル80センチくらいあるんですね。人間の2.5倍ぐらいの背丈です。そういうところも代々言われていたのを守ってというか、実際にモデルにしたものもそのように描いてあるんだと思うんですけど。先ほどの金剛峯寺の涅槃図のお釈迦様は真上を向いて寝ていらっしゃったんですけど、鎌倉時代はそういう姿は多くて、足の方からみると本当に立っているように見えるんですね。だから説法し

ているような格好で、非常に顔も若々しくて、とても入滅されたとは思えない顔つきに見えるんですね。

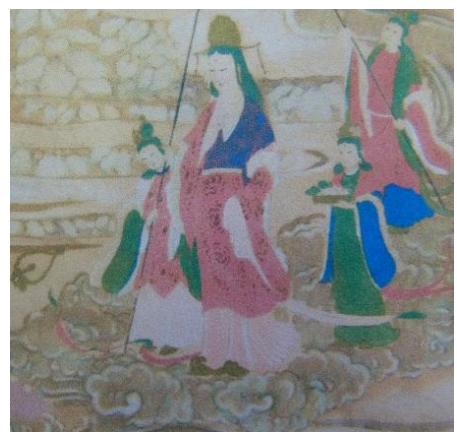
お母さんの摩耶夫人ですけど、スケッチでは悲しんでおられる顔がそのままですね。もう泣いているんじゃないかと思うような。お釈迦様を生んで7日目にお母さんは亡くなっているということなので、たぶん下界の事はわかっていると思うんですけど、その時期が来たという事で泣いている。でも、下図の形とでき上がったものを比べると、でき上がったもののほうがピツとしている雰囲気があります。悲しい気持ちは当然あるにしても泣くのではなくて、覚悟があるような感じに見えるんですね。

京吉さんも下図を描いて、「さあ本図に」というときに、この顔で良いのかな？と、たぶん思ったんでしょう。それはスケッチブックの最後にですね、お釈迦様と同時に母さんの絵も描いてあるんですけど、そこに『靈華』と書いてあるんですね。『靈華』というのは吉川靈華(きっかわれいか)という明治時代の絵師です。彼の『離騷』という絵の人物にそっくりなんですよね。たぶんそういう凛としたお母さんの顔立ちを、最後に持ってきたんだと思うんですね。

この吉川靈華は、絵を描く時には5日間くらい籠りっきりで、大汗をかきながら運筆していったらしく、「描き終わった時には、げっそりしていた」という奥さんの言葉があるくらい、線にすごく気合いを入れて描かれていたみたいです。線の強さというんですかね、そういうところが見えるかなと思います。



▲摩耶夫人（スケッチ）



▲摩耶夫人（涅槃図）



▲阿修羅 (スケッチ・下図・涅槃図)

両手に白い玉と赤い玉をのせているのは「阿修羅」です。白い玉は月で、赤い玉は太陽だということです。スケッチではちょっとお爺さんのような顔立ちなんですけど、涅槃図は若々しく見えます。表情は怒りというよりは、「この時かあっ」というふうにびっくりしたように見えるんですね。こういうふうに変わってきている。

もう一つはですね、下図では、「那羅延金剛」という金剛が沙羅の木から離れた位置にいたんです。それが本図ではグッと引き寄せて、沙羅の木の近くに来ています。下図の位置を見ると、すぐ上の「広目天」の視線と「難陀竜王」の視線の

交点のような気がするんですね。つまり、「那羅延金剛」に「泣くな」と言っているような気がするんですけど、それが本図では引き寄せられたから、驚きというか、人を叱責するというよりは、なんか詰まったものを吐き出したような感じがちょっとします。このように変えたことによって全体的なまとまりもまた変わってくると思うんですね。

同じように右下に「足疾鬼」という鬼さんがいるんですけど、下図の時よりも前方に近寄ってきているんですね。また、卒倒して倒れている「阿難」を介抱するために、鉄鉢に受けた水をやって回復させようとしている所作ですね。ただ、「阿難」までは距離があるので、実際は水をたらたらと垂らすというわけにはいかずに、なんかピョッとかけたような感じです。少し矛盾はあるんですけど、お話の一場面としてあったということだと思っんですね。

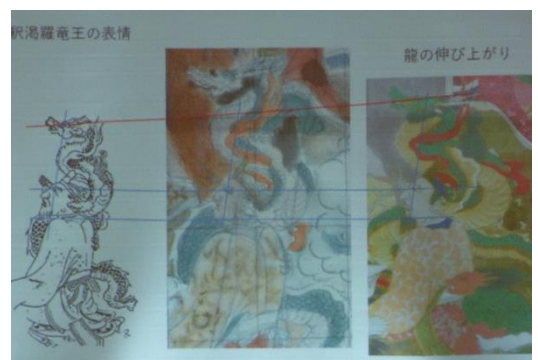
もう一つ、お釈迦様をずっと診ていた「耆婆大臣」というこの土地のお医者さんが下図には入っているんです。でも、スケッチにはこのお医者さんはいなくてですね。どこかで「耆婆大臣っていうお医者さんはいるよ」「必要なんだよ」と聞いたのかどうか分かりませんが、お釈迦様の足元、手前に登場しています。



▲上 虚空蔵菩薩 下 弥勒菩薩

話は変わりますが、「菩薩像」を分析的に見てみようかと思って、下図、スケッチの顔を見ました。そうすると最初のスケッチの時の正中線というか顔の線がだんだん傾いてきているんですね。これは何を言おうとしたのかな？ちょっとうっむき加減になってきています。少しうっむいて、目は瞑っているようにも見えるし、視線が遠くなったようにも感じます。

涅槃図の右下に描かれているのは「竜王」で背負っているのは竜。竜を肩に乗せているんですけど、竜がギュウッと伸び上っているのは、びっくりしたような感じに見えるんですね。お腹もねじれていて、動きのある絵にしていますね。



▲竜王 (スケッチ・下図・涅槃図)

「阿修羅」の右斜め下、沙羅の木の間には、鶏を頭に付けている「迦楼羅王」が描かれています。金色が鶏さんで、ちょっと目尻が下がった感じですが、ピッと緊張感がある顔になっています。右端の「広目天」は、頬骨をきちっと描き入れて若々しい顔になっています。阿修羅も本当に青年のように若々しいですね。

俗人については、左側に「純陀」がお米を捧げて上を向いている。視線がお釈迦様を見ているように見えます。お釈迦様の足元には「お婆さん」がいて、お釈迦様の説法を自分も聞きたいと思ってずっと追っかけをして、百歳ぐらいになったんですかね。そして、やっと会えたと思ったら、入滅されていたということだそうです。「ああ、せめて足でも」ということで足を触っているようですね。



▲涅槃図（一部）と下図（一部）

そういうふうにして、まとめた全体図を見てみましょう。下図では、登場人物を繋いでいくと、右肩下がりの楕円に見えるんですけど、本作を繋げると真ん丸で、水平になって画面に安定感というか、落ち着きをもたらすような配置になったのかなと。そのために、下絵では右側に離れていた「那羅延金剛」を近くに持ってきて、右下の「足疾鬼」を引き寄せて描いています。このように位置を考えることによって、画面全体の落ち着きが出たのかなと思います。丸くすることによってだれが何処、「貴方はこの品格だから、ここでないといけない」という指定席が無い。皆がわあっと

集まってきて、だれも「ここは私の席なんだ」という文句をつけることもなく、綺麗に収まっている。丸く収まっているような感じがして、穏やかな雰囲気を作り出していると勝手に解釈しています。

また話が変わりますが、登場人物がどこを見ているのか、視線を追いかけてみました。視線によって登場人物の心の中に写っているお釈迦様の位置がわかるかなと。非常に感覚的で、表面的な捉え方になるかもしれませんが、他所を向いている、目が遠くを見ているとなると、時間の長さを感じます。過去にまで遡ってお釈迦様のイメージを心に描いているのかなと勝手に思うのですね。そのようにして見ていると、菩薩の視線とお弟子さんの視線、動物たちは非常に落ち着いているように見えます。牛の後ろに、顔が人間で体は鳥という「迦陵頻伽」が描かれています。下図では頭が北側を向いているんですけど、本作ではお釈迦様を見ているというふうに、スケッチから回転させて絵を描いています。



▲涅槃図（一部） 登場者の視線

比較	石川 妙圀寺		大阪 勝尾寺		兵庫県立歴史博物館	
視線	釈迦へ	他へ	釈迦へ	他へ	釈迦へ	他へ
菩薩	8	0	6	2	6	0
天部	17	12	13	8	14	6
弟子	9	6	7	8	7	9
長者など	5	1	5	1	10	1

比較	興善院(京吉)		岐阜 正尊寺		岐阜 小林寺	
視線	釈迦へ	他へ	釈迦へ	他へ	釈迦へ	他へ
菩薩	4	4	4	8	4	4
天部	12	9	8	11	7	12
弟子	3	10	6	5	10	5
長者など	4	2	4	2	4	3

▲宝座の周りの配置、視線

「視線がお釈迦様に向かっているか、そうでないか」を表にしてみました。妙圀寺や勝尾寺の涅槃図を見てみると、「菩薩」「長者など」はほとんど、「天部」は半分以上のものたちがお釈迦様を見ています。「弟子たち」はいろいろな方向を見ているようです。京吉さんの涅槃図は、お釈迦様を見ている「菩薩」や「天部」は半分くらい。「弟子」はほとんど見ていない。こっち向いたりあっち向いたりしています。場面の想定の方によって描き方が違ってきて、この視線に京吉さんの涅槃図の特長があるのかなと思います。

もう一つ、満月についてですが、お釈迦様が亡くなるのが2月15日でちょうど満月なんですね。満月が描いてあるんですけど、涅槃図はお釈迦様が亡くなったところを見下ろすように描いていて、その時には普通お月さんは見えないと思うんですね。上方にあるお月さんは見えないと思うんですけど、一緒



▲涅槃図の下図

に入っている。お母さんも上方に来ているんですけど、どちらかというとなから見たそのままがずっと俯瞰的に描いてあって、その後はお釈迦様を上から見ているように描いてあるんだけど、月もちゃんと見える。実際に違和感はあるかないか、日常的にも月に照らされている草むらの花を見て、月を見て、「あ、月の元に花が照らされているんだな」と思っているの、でき上がった映像は、月があって花もあるというのを再構成していると思うんですけど、ほんとに絵に描いてしまうと、月だけになるか、花だけになるか、が普通だと思います。お話では、2月15日に亡くなったというので、ちゃんと月が出ている。

京吉さんは、美術学校卒業の時に修学旅行のようにして、近畿地方に出かけ、奈良・京都の仏像を描いています。そのスケッチが残っていますが、そういうのも役に立っていて、そこからいろいろ発想も出てきたのかなとも思います。また、『離騷』を描いた「吉川霊華」は中国の古文書を読んで、お話を想像して描いていますが、状況や心境の描き方、その構成力が凄いなと思いますし、京吉さんもそういう所に魅かれて、『摩耶夫人』の参考にしたのかなと思います。



▲涅槃図の動物について説明する石川さん

今日は、京都国立博物館の美術室長だった中野玄三さんが書かれた『日本の美術 no.268 涅槃図』などを参考にしながらお話をさせていただきました。満月というと、西行法師の歌に「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」というのがありますね。新暦にすると3月のことで「桜の花の下で死にたいな」というような解説も聞くんですけど「お釈迦様と同じように死にたかったのかなあ」とちょっと思ってますね。昔の人もいろいろ自分の人生を考えていたのかなあと思って、涅槃図を勉強する時にすごく勉強になりました。今日はどうもありがとうございました。